

図書館資料としての旅行案内書（二）

門上 光夫（中央図書館）

第四節 旅行案内書の〈カタチ〉

「図書館資料としての旅行案内書（一）」において、第一節では、図書館にとって旅行案内書が重要な資料であることを指摘し、第二節と第三節で、旅行案内書からさまざまなことが読み取れることを紹介した。しかし、「旅行案内書」とは何か、について明確にしてこなかった。というよりも、そもそも旅行案内書を定義付けるのは非常に困難である。

旅行案内書は「旅行に際して必要な情報が掲載された資料」と説明することができるかもしれない。だが、このような簡単な説明では、あらゆる資料が旅行案内書になってしまう。

個人的な経験ではあるが、先年、鳥羽の神島を訪れた時、島への観光客のほとんどが小さな本を手にしていた。それはどうやら三島由紀夫の『潮騒』の文庫本らしかった。神島は『潮騒』の舞台である歌島のモデルとなった島であり、三島が筆にした光景をそこかしこに見ることができた (1)。

また、山本光正は「旅行案内書の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 155 集 (2010 年 3 月) で、「一時期和辻哲郎の『古寺巡礼』を片手に奈良の古寺を歩く旅行者が多くいた」と書いている (112 頁)。

『潮騒』も『古寺巡礼』のいずれもがその土地を旅行する者にとっては、重要な情報を載せた資料といえる。このように「旅行をする立場からみれば、旅行のための案内書とは（中略）旅行のために出版されたものとは限らない。紀行文・名所図会、時には随筆や小説等も旅行の案内書となりうるものである」（山本 前掲 112 頁）と言える。しかし、小説や随筆は「旅行の案内書」と成り得ても、これを旅行案内書と呼ぶことはできないであろう。

大塚幸男は「フランスの旅行案内書」『学燈』第 55 巻第 4 号 (丸善 1958 年 4 月) で『ヌーヴェル・リテレール』1956 年 6 月 21 日号に掲載された旅と読書との関係を論じたミシェル・デオンの一文を挙げ、小説や随筆と旅行案内書をきっぱりと区別している。

「われわれは旅に書物を携えて行つて、実地と照らし合わせてみたいとの望みを抱きがちである。（中略）スタンダールの『散歩』をローマで、（中略）しかし、これはかなり危険な誘惑である。どんな美しいテキストも現地ではその生命を失う恐れがある。それぞれの著者

がわれわれに押しつける影像は、目庇（まびざし）付きの帽子をかぶつたガイドの、のべつ幕なしのおしやべりとほとんど同様にわれわれをいらいらさせる。それよりも、旅人にとって必要かつ有益な唯一の本は旅行案内書である。旅行案内書の無味乾燥な、いや、客観的な淡々たる記事は、想像をほしいままにする余地をわれわれに残しておいてくれるからだ」（45頁）。

旅行案内書がどのようなものかについては、観光学関係の辞典でも明確に定まっていない。

岩田晋典は「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学部紀要』第12号（2010年3月）で、観光学等の辞典に「旅行案内書」の項目はあっても、「有名なガイドブック・シリーズの創始者や『旅行用心集』などの個別事例しか紹介されていない」という（6頁）。また、金子直樹も「国内観光とガイドブックの変遷」（神田孝治編著『観光の空間 視点とアプローチ』（ナカニシヤ出版 2009年10月）所収）で刊行された数が膨大で、その体系的な把握が困難なために書誌学的な検討は充分なされてこなかったと指摘する（125頁）（2）。

例えば、『現代交通観光辞典』（広岡治哉/監修 創成社 2004年5月）53-54頁の古賀学が執筆した「観光ガイドブック」の項目では、旅行案内書の事例の説明にはなっているが、何ををもって旅行案内書とするかの説明はなされていない。

「観光情報を専門に提供している媒体が、観光ガイドブックである。民間の旅行関連出版社が出しているのが主流であるが、地域の観光協会等においても、観光宣伝媒体として作成しているところもある。以前は、情報が固定的で全集的に網羅したガイドブックが主流であったが、利用者の志向の移り変わりが激しく、それに合わせて地域情報も大きく変わっていくため、新たな情報がタイミングよく提供できる雑誌的情報誌（ムック版）などが観光ガイドブックの主流となってきた。それに伴い情報の内容も、観光資源・施設の内容が最小限となり、宿泊施設や飲食店、土産品、交通機関などの民間企業に関する情報が主流となってきた。また、露天風呂、ペットと行く旅など、テーマを絞ったガイドブックも多くなっている。ミシュランなどの自動車向け観光ガイドブックに掲載されたホテル・レストランの星の数による評価はよく知られており、簡便なガイドブックが主流の中、わが国においても、このような利用者にとって選択の目安になるような信頼性の高いガイドブックの作成も必要とされている」。

『現代観光学キーワード事典』（前田勇/編著 学文社 1998年4月）は15頁に「旅行案内書（Guide Book）」という項目を有している。橋本俊哉による執筆で、「旅行関連情報を提供することを目的とした出版物のことで、通常、自然・歴史・文化など旅行目的地を理解するために必

要とされる情報に加え、交通・宿泊・飲食・土産品・観光ルートなど、観光を行う際に必要とされる情報が掲載される」と書かれ、以下、ヨーロッパにおける旅行案内書の誕生と発展を概観する。

しかし、18頁の「旅行案内書（江戸期の）（Guide Books in Edo Era）」の項では橋本は、江戸時代の旅行案内書の個別事例とその流れを記述している。「わが国の旅行案内書の嚆矢」を明暦元（1655）年に刊行された東海道の案内書である『明暦板道中記』と、ほぼ同じ時期に出版されたという中仙道の案内書『きそ通名所尽』とし、「これらはともに携帯しやすい小冊子であった」とするが、その後に「机上で楽しむ」ことを目的とした中川喜雲『京童』（1658）と浅井了意『東海道名所記』（1659）を紹介する。

また、旅行案内書の白眉として名高い『東海道巡覧記』（1745）を挙げ、「一般的な旅行についての注意や迷信的記述の一切ない実用本意のもの」、「江戸時代も後期になり、庶民の旅がより一般的なものとなると、旅行時の注意書きが詳細にまとめられた『旅行用心集』（1810）などが刊行された」とする。しかし続けて、名所図会や、『道中膝栗毛』シリーズのような滑稽本を例に挙げて「各地の名所や風物に関する情報が、さまざまな媒体を通して庶民層に浸透してゆく」と書く。

橋本によるこの項は、先の「旅行案内書（Guide Book）」に挙げた「旅行関連情報を提供することを目的とした出版物」と、滑稽本なども含む「実際に旅に出なくても読めば旅をした気分させられる本」が混同している。旅行案内書と小説や随筆が区別されていない。

もっとも判りやすいものが細野光一の執筆した『観光事典』（日本観光協会 1995年3月）の「ガイドブック guidebook」であろう。細野は「わが国でガイドブックといえば旅行関連のものを指すほど観光ガイドブックは旅行にとって欠かせないものとなっている」とし、「各地の観光資源・施設を軸に、宿泊施設や飲食店、土産品、特産品など、また、交通関係の情報などから構成されている。地域別に編集されたものが主流であるが、スキーや温泉といった活動別に的を絞ったものも多数みられるようになってきている。

わが国の市販のものでは、JTBのポケットガイドや新日本ガイド、実業之日本社のブルーガイドなどが歴史を有する」と書く。

「観光ガイドブックは旅行にとって欠かせないもの」といった目的に加えて、「各地の観光資源・施設を軸に、宿泊施設や飲食店、土産品、特産品など、また、交通関係の情報などから構成されている」といった旅行案内書の〈カタチ〉を明示した上で具体的な旅行案内書を挙げている。

このように、旅行案内書がどういうものかについては、「旅行に使われる資料」といった目的観点からだけではなく、その<カタチ>＝記載方法や体裁、内容構成にも着目する必要がある。

岩田は前掲の論文で、『現代観光学キーワード事典』における橋本の「旅行案内書」の定義を出発点に紀行文や旅行記と比較して旅行案内書の特徴を以下のようにまとめている。

①形式

紀行は著者の旅行のプロセスに沿って記述が進み、体験談、印象、思索が物語られる。

一方、ガイドブックは、当該国への移動、入国方法、地域の概要、見どころ、宿泊施設など対象とする分野の関連情報を記事として多数の項目にまとめ、体系順に整然と配列したもので、『図書館情報学用語辞典』（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会/編 2007年）の記述を用い、特定の項目を容易に調べることができるようにしたレファレンスブックであるとする。

②内容

紀行は、特定の地域を取り上げても、記述は作者の関心のある特殊・限定的なもので、「著者の専門の事物が中心的に取り上げられる」（13頁）。

一方、ガイドブックは、「汎用的な情報を包括的に提示することが目指され」、事実の解説や案内の指示の正確さが求められる「実用的」なものである。

③著者

紀行は著名な作家によるものが多いが(3)、ガイドブックは無名的である。「ガイドブックの場合、有名な人が作ったガイドブックを挙げることの方が困難」（14頁）である。

④書籍の類型

紀行は、一度のみの単独で出版される単行物が目立つが、ガイドブックはシリーズ物が多い。速報性・多様性・雑多性・広告志向のある雑誌とも分けることができる。

⑤図書館での扱われ方

ガイドブックは「基本的に図書館に保存されない」「“使い捨て”の出版物」である。

そこで岩田のまとめに従って旅行案内書を「実際に旅行するために当事者にとって必要とされる情報を不特定多数の人々に対して包括的・汎用的に提供するレファレンス的書籍」で「シリーズ的なものが多いという特徴や、有名な人物が著者になることが少ない傾向、さら

には、図書館に保存されることが少ないという傾向をもつ」（14頁）書籍と定義する。

そして、以下において近世以来「旅行案内書」と称されてきた書籍を射程に加えて、改めて、〈カタチ〉から旅行案内書とはどのようなものかについて考察しておきたい。

前掲の山本の論文によれば、「旅の時代（近世から明治中期までの徒歩による移動が中心の時代—引用者註）における旅行案内書の中心は道中記である」とする（113頁）。徒歩による移動では、旅人が全行程中のどの辺りにいて、次の宿までどのくらいか知る必要があった。そのために「街道全域を案内する旅行案内書＝道中記」が不可欠だったからである。

そして今井金吾の研究（『道中記集成』全47巻（大空社 1996年6月—1998年7月））に依拠して、道中記がいつ頃から出版されたのかは定かではないが、刊記のある最古の道中記を『明暦板道中記』とする（4）。

『明暦板道中記』の刊記には「明暦元乙未仲秋吉日 小嶋弥兵衛開板」とあるから、1655年の刊行となる。4丁表、日本橋より始まって三条大橋までが記述される。26丁。タテ13.8センチ×ヨコ9.8センチで携帯が可能な道中記である（『道中記集成』第一巻所収 三井文庫所蔵本 高陽2039）。

また、『明暦板道中記』よりも前に出版されたと考えられているものとして『日本道中名所尽』（『きそ通名所尽』）がある。改丁後1丁表に「江戸よりきそ通京大坂西国方々江道名所尽」とあって、19丁裏までが中仙道の記述で、後に西国方面への里程が記されている。タテ13.5センチ×ヨコ9.5センチの道中記である（『道中記集成』第一巻所収 個人所蔵本）。

『日本道中名所尽』『明暦板道中記』共、実際に旅行する当事者にとって必要な情報を掲載し、道順に短いながらも名所（観光資源）を記載する携帯が可能なレファレンス的書籍である。山本は、『明暦板道中記』に主な橋の長さが記載されていることに注目し、旅の主要な見物対象が建造物であり、橋もそうした見物対象としての要求に応じて記述されたであろうと推測している（114頁）。

道中記の基本は、明暦期（1655-58年）に成立し、延宝期（1673-81年）に完成したとする（115頁）。しかし、識字率の低さや価格、旅が大衆化していない時期であり、道中記は武家やある程度の教養を持った富裕層に利用が限られていたと考えられるという（120頁）。

近世の旅行案内書といわれるものには名所記もある。

万治3（1660）年の浅井了意『東海道名所記』は東洋文庫（平凡社）の朝倉治彦の解題によると、大本6冊で、朝倉の見たものでは東京都立中央図書館加賀文庫本のタテ27.1センチ

×ヨコ 17.8 センチが最大で、東海道各所の名所を和歌や俳句を添えて記述している。この名所記は地域ごとに名所（観光資源）を記述した書籍ではあるが、楽阿弥という僧と大坂の手代である男の二人が旅する物語として記述されている。

道中記の完成した延宝期に入って、大坂で最初の名所記が刊行される。

延宝 3（1675）年の『蘆分船』は一無軒道治による名所記で、全 7 冊であり、名所が地域別に記されている。巻一 28 丁に難波京、堀江、今宮夷、逢坂清水、一心寺、安居天神など、巻二 15 丁に住吉、津守、飛田など、巻三 23 丁に難波御坊、津守御坊、座摩、道頓堀など、巻四 20 丁に玉造稻荷、生玉、高津など、巻五 13 丁に難波嶋、茨住吉、野田など、巻六 22 丁に曾根崎、堂嶋、天満宮など、附録 10 丁で構成される。タテ 25.5 センチ×ヨコ 18.7 センチの書籍である（大阪府立中之島図書館所蔵本 甲和 206）。

また、延宝 8（1680）年『難波鑑』も一無軒道治によるもので、巻三が 19 丁、巻四が 15 丁。タテ 27.4 センチ×ヨコ 19.0 センチであり、大坂各地の名所や祭事の解説が記述され、『蘆分船』共に、物語として語られてはいない（大阪府立中之島図書館所蔵本 甲和 994）。上杉和央は「17 世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」『地理学評論』第 77 巻第 9 号（日本地理学会 2004 年 8 月）で、『蘆分船』と『難波鑑』を比較し、『難波鑑』には過去の出来事に由来する名所が『蘆分船』より少なく、「祭事の子細や繁華な様子といった『現在』の状況に重点を置いた記述が圧倒的に多い」と指摘する（601 頁）。

また、商工諸職案内といったジャンルの書物も延宝期に刊行されている。

『難波雀』は刊記「延宝七年己未歳三月吉日 小嶋屋長右衛門 古本屋清左衛門」で 86 丁。タテ 8.0 センチ×ヨコ 19.3 センチ（大阪府立中之島図書館所蔵本 甲和 391）。『難波鶴』は刊記「延宝七年己未歳七月吉日 京はん木屋 伊右衛門板」で 129 丁。タテ 8.5 センチ×ヨコ 19.3 センチである（『古版大阪案内記集成』／定本は慶応義塾大学図書館所蔵本）。

共に観光資源である名所を案内したというよりも、大阪城代、諸大名御屋敷（場所、留守居役の名前、名代）、諸国船印、公儀橋、商店（問屋、風呂屋）、医者など都市の生活に必要な事項が記載されている。

上杉は延宝期における大坂の名所記や商工諸職案内刊行の背景に、出版文化の定着と近世的都市の確立があったとしている（595-597 頁）。

その後、1750 年代から 60 年代にかけて集中的に優れた道中記が出版されるようになった。その理由は旅の大衆化と安価で手軽な道中記が求められるようになったことにあるという（山本 前掲 123 頁）。

延享 3 (1746) 年の盧橘堂適志による『東海道巡覧記』は凡例に「旅行の袖に携て益有やうに輯録す」とあって、実際に旅行の際に携帯した旅行案内書として刊行されたことを明記する。75 丁でタテ 11.2 センチ×ヨコ 16.6 センチ。61 丁表まで京都から江戸の名所、神社、仏閣、古戦場を記した道中記である（『道中記集成』第八巻所収 今井金吾所蔵本）。

寛延 4 (1751) 年の『伊勢道中行程記』は今井によれば、旅に携帯できる実用的道中絵図の最初で、タテ 17.0 センチ×ヨコ 8.9 センチの折本である（『道中記集成』第九巻所収 今井金吾所蔵本）。

続いて大本の名所記も充実し、いわゆる名所図会が誕生する。安永 9 (1780) 年には秋里籬島による『都名所図会』が刊行され、『大和名所図会』『摂津名所図会』と続いていく。

これら、名所図会はしばしば近世のガイドブックとして紹介されている (5)。たしかに「各地の観光資源」の情報は掲載されているが、前述のとおり大本、複数冊で旅行の際に携帯するのは困難な名所図会が旅行する当事者にとって実用的な書籍だったかどうか疑問がある。

西野由紀「先達はあらまほしきー『名所図会』と旅人ー」『国文学論叢』第 52 輯（龍谷大学国文学会 2007 年 2 月）では、清河八郎の日記より、京都に同行した清河の母親が『都名所図会』を購入し、祇園祭や西本願寺についてこの本を参照したと記している。「八郎たちが『都名所図会』そのものを携帯して名所巡りをしていたのかどうかについては不明である。しかし、少なくとも名所に関する情報源としてこれを活用し、且つ、日記で省略した情報を補完するものとして利用していた」（87 頁）という。

また、徳川家茂の警備員として二条城に配備された萩原貞宅は、非番の日に京都市中や近郊に遊び、その名所に関する日記の記述が『都名所図会』と近似の上、雨の日にこの本を広げて、次はどこに行こうか検討していたらしい。

西野は、「土地に不慣れな場合、まず『名所図会』によって土地の情報を得、その予備知識をもとにして現実の京都に遊ぶ。その際の留意点などを『名所図会』の本文の記述や挿図から心得として学び、旅を実践していたのである。こうして旅人は土地に関する情報を獲得、実践しながら、いわば、旅を演出する道具として『名所図会』を利用していたのだといえよう」という (88 頁)。これまでの地誌類との決定的な違いが名所図会の実景としての「風景画の妙」にあったとして、人々の旅への欲望を駆り立て、実践的に旅の情報を得ることができた『名所図会』は単なる地誌、名所案内書を超えた、より実践的な旅の行為を導く手引書として活用されうる本だったのである」と結論づけている (89 頁)。

名所図会は実際に携帯できなかつたとしても十分に旅行案内書としての機能を果たしてい

たと考えられる。

大阪府立図書館の所蔵する近世の「旅行案内書」を見る限り、天保期（1830-44 年）に入ると、道中記だけでなく、土地の名所記の「軽量化」が見られる（6）。これは、山本が 1800 年代に入って道中記の出版が増加し、その要因を特定できないとしながらも識字率向上、旅行者の増加、講の成立と講中による道中記の出版に求めたことと相応すると思われる。以下の資料はいずれも大阪府立中之島図書館所蔵本である。

大坂・伏見の船宿のリストと淀川の両岸の案内図を載せた『増補登船独案内』（松川半山画 天保 8（1837）年）。タテ 7.0 センチ×ヨコ 16.2 センチ。

大坂を訪れた遠方の人が案内人なく見物できるように作成された『難波巡覧記』（天保 8（1837）年）。タテ 7.0 センチ×ヨコ 16.0 センチ。

大坂から江戸までの道中絵図と江戸・京都・大坂の名所名物を記した『道中細見定宿帳』（嘉永 4（1851）年）。タテ 7.1 センチ×ヨコ 15.3 センチなどである。

明治にはいっても、初期は近世のスタイルを踏襲しており、1879（明治 12）年刊行の品川・横浜間に汽車の絵が入っている 1 枚刷の『大坂改正浪花講』がある。

近世においても、道中記、名所記、名所図会にみられるように「実際に旅行するために当事者にとって必要とされる情報を不特定多数の人々に対して包括的、汎用的に提供するレファレンス的書籍」は刊行されていた。しかし、無名的な書籍であったとは言い難いところがある。

やがて、装丁が和装から洋装へ変わるが、その中で、1899（明治 32）年の宇田川文海『南海鉄道案内』や 1910（明治 43）年の田山花袋『新撰名勝地誌』が刊行されている。このように明治期まで、著者は必ずしも「無名的」ではない。これは第三節「『中之島』イメージの変遷」で紹介した旅行案内書でも同じような傾向を見ることができる。

しかし、大正期頃よりシリーズ化された無名的な旅行案内書が登場する。

無名的な旅行案内書は主に鉄道院→鉄道省やジャパン・ツーリスト・ビューロー→JTB 及び自治体によって作成され始めており、その内、全国的な組織を持つ鉄道院→鉄道省やジャパン・ツーリスト・ビューロー→JTB がシリーズ化した旅行案内書を刊行している。

鉄道院→鉄道省は、大正期を通じて『鉄道旅行案内』を刊行している。「鉄道に頼って旅行せられむとする大方に向って其探勝遊覧の葉に供せんが為に発行した」もので（出版年不明、大阪府立図書館の受入印は大正三年七月九日）、日本全国の鉄道沿線の名勝地を 1 冊に記述し、他に銀行、会社や都市における各種娯楽施設、主要な物産、名物を掲載している。

1929（昭和 4）年からは『日本案内記』が刊行される。東北篇より始まって、毎年、関東篇、中部篇と地方ごとに 1 冊ずつ、全 8 冊が出された。各地方の名勝地だけでなく、概説、年中行事、方言、歴史や建築物の構造の解説もあり、鉄道旅行案内の頂点であるとされる。

一方、ジャパン・ツーリスト・ビューロー→JTB は、前掲の金子論文が「戦前からの系譜」として簡潔にまとめているのでそれに拠る。

『旅程と費用概算』は 1919（大正 8）年から毎年一巻ずつ刊行されたもので、モデルコースの提示と所要時間、値段、名所・旧蹟が記載される。1940（昭和 15）年に休止となったが、1952（昭和 27）年に『旅程と費用』で復刊し、1970-79 年には『全国旅行案内』として刊行されていた。

『ツーリスト案内叢書』は 1935（昭和 10）年から数十頁程度の携帯可能な旅行案内書として出されたもので、縦書きで地図・写真は最小限に抑えられ、地誌的内容も記述するヨーロッパ起源のガイドブックの系統という。1941（昭和 16）年に『東亜旅行叢書』となるが、戦時下の影響で簡略化される。『旅行叢書』『新旅行案内』として 1976（昭和 51）年まで刊行されたシリーズである。

1962（昭和 37）年に出た国内版『ガイド・シリーズ』は「従来のガイドブックの概念を変える画期的な商品」で、本文を横組みとし、地図、イラストを多用した視覚要素を重視したレイアウトであった（『日本交通公社七十年史』1982 年 377 頁）。これは後の『ポケット・ガイド』シリーズにつながっている。『東京（ポケット・ガイド 11）』（日本交通公社 1970 年 11 月）は全 119 頁で広告が続く。各地域別に分けられ、その内が「食事」「喫茶」「ショッピング」「散歩道」で見所の紹介がされる。しかし、例えば皇居の記述は少なく、皇居前広場は「正式には皇居外苑という。昔は諸大名の屋敷のあった所だが、今は修学旅行生や観光客で賑わっている。アベックの多いことでも有名」としか書かれていない。

以上みてきたことを先述した定義に当てはめてみると次のように言えるだろう。

旅行案内書とは、実際に旅行する当事者が必要とする各地の観光資源、観光施設、宿泊施設、飲食店、土産物、特産物、交通等の情報について指示・解説が客観的に記述され、かつ体系順に配列された実用書である。それゆえに新しさや正確さが強く求められている。

確認できるわが国最初の旅行案内書は明暦元（1655）年に刊行された『明暦板道中記』である。庶民に旅が浸透していく中で、寛延 4（1751）年には絵図の入った『伊勢道中行程記』という道中記が出される。

また、近世的な都市や街道の成立により実用的な名所記が延宝期頃より発生し、安永 9 (1780) 年には鳥瞰図を多用した名所図会が誕生した。これらの名所記や名所図会の類は大本で複数冊から構成されるため、携帯に適しておらず、これらを実際に手にして旅がなされたかは不明だが、旅行案内書として使用されていたことが伺える記述が近世の人々の日記から確認することができる。

明治に入って以降のしばらくは、近世的な旅行案内書のスタイルが継承されていたが、鉄道省（鉄道院）やジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）など旅行案内書を発行する全国的規模を持つ組織が成立し始めた大正期頃より日本全国を対象とした『鉄道旅行案内』『日本案内記』『旅程と費用概算』といったシリーズものが生まれた。

戦後期には旅行案内書はシリーズものが中心となり、ある特定の著者が旅行案内書を執筆する傾向は極めて少なくなる。

第五節 観光パンフレットについて

旅行案内書に類するものの一つに逐次刊行物（旅行雑誌／地域情報誌）がある。逐次刊行物については、図書館学の教科書において、図書館が収集、整理、保存して提供する基本的な資料として位置づけられており、その重要性については多言を要しないであろう。

旅行雑誌について、森正人は『昭和旅行誌 雑誌『旅』を読む』（中央公論新社 2010 年 12 月）で、1924（大正 13）年から 2004（平成 16）年まで JTB から発行されていた旅行雑誌『旅』を読み解くことで、昭和における日本人の旅行と旅行観を考察している。

森によれば、『旅』は創刊号から旅行を通じて日本人を「啓蒙」する目的を掲げ、「茶代問題」「日本を代表する景勝地」「旅行者のモラル向上」、戦後には「さまざまな旅行のスタイルの提案」や「旅行で見るべきものなど」を「紹介してきた」という。しかし、情報が断片化し、カタログ化するなかで、「事物や情報の価値を決定する『大きな物語』の失効とでも呼ぶうる事態」が「啓蒙」を掲げていた『旅』の社会的役割を失わせたと述べている（269-273 頁）(7)。

旅行案内書に類するもののもう一つに観光パンフレットがある。観光パンフレットは、実際に旅行する当事者に必要な情報を載せたもので、観光案内所や交通機関等で多種多様に頒布され、小冊子もしくははらしや畳物などの 1 枚物も多い印刷物である (8)。

内容は、各地の観光資源や宿泊施設、飲食店、土産物、交通機関の情報などを記載するが、

旅行案内書と比べて、掲載するスペースに限りがあるので、地域やテーマが限定された情報が載せられている。また、形式的には旅行案内書のようなレファレンス的な体系には配列されず、地図や図版、写真を大きく配して、一目で内容や地域の全貌がわかるように工夫されているものがある。書誌事項（書名・出版者・出版年）が明記されていないものも多い。

このような観光パンフレットは、その形態から、網羅的な収集が難しく、旅行案内書以上に「捨てられる運命」にある資料といえる。

しかし、観光協会や交通機関などアピールする主体が作成することが多く、そのアピール度は、第三者である編集者が介在する旅行案内書より大きいといえ、それと「なまざし」の交差点を読み解くことのできる重要な資料でもある。例えば、第一節で紹介した観光艇「水都」のアナウンスも「水都」を運行していた大阪市が発行した観光パンフレットに掲載されていたものである。

以下、観光パンフレットをテキストに用いた、又はテキストに用いる意義を説いた研究成果を挙げて、観光パンフレットも資料的価値をもつ重要な図書館資料であることを指摘していきたい。

浅川雅美・岡野雅雄の「与那国島の観光パンフレットの訴求内容分析」『湘南フォーラム 文教大学湘南総合研究所紀要』No. 12（文教大学 2008年3月）は、観光パンフレットが旅行目的地の魅力をどう訴求しているかを、与那国島をモデルケースとして検討した論文である。

『与那国島-Dr. コトー診療所ロケ地マップ』（与那国町役場・与那国町観光協会発行）という観光パンフレットを対象に、テキスト・マイニングの手法を用いて、パンフレットに使用された語（訴求内容）の頻度を分析している（9）。旅行案内書に記述された語を分析する点において、第二節で見た小長谷論文や今野らの論文と基本的に同じものである。

さらに浅川らは「離島の観光パンフレットに対する反応の分析-与那国島の場合-」『島嶼研究』第9号（日本島嶼学会 2009年9月）で、このパンフレットを見た消費者の受容内容の分析を行い、どのようなパンフレットにすれば観光活性化の効果が高かまるかという実証的な分析を試みている。

訴求分析では、パンフレットに使用された名詞を「自然資源」「文化資源」「ドラマ関連」「地名」「その他」に分類したところ、「島」「海」「自然」「日本最西端」といった「自然資源」に関する記述が多く、次いで「コトー先生」「シーン」といったドラマに関する記述が多かったという。逆に「文化資源」に関する記述は「墓」の1つで4回使われただけであった。

ここから浅川らは旅行目的地として「ロケ地」が「その土地の魅力を高める要因として無視できない」新しい「文化資源」として立ち現れていることを指摘している。

また形容詞から、与那国島が沖縄本島とは違った独自性を持った島で、目的地で期待する経験では「冒険的・刺激的」という面を訴求していると分析している（144-145頁）。

対して、受容分析においては125名の与那国島を訪れたことのない学生に当該パンフレットを配布して、600字以内の感想を記述してもらい、上記同様にテキスト・マイニングの手法を用いて分析を行っている（10）。

結果的には、与那国島が独自性を持った刺激的な観光地という「パンフレットで訴求しているこの2特性が消費者に伝わっていることが確認できた」という（26頁）。

その一方で、推察の域を出ないとしながらも、「南国」に対するイメージの影響のためか、「リラックス」を求める結果も得ており、もし与那国島に対する消費者の志向が「刺激的」より「リラックス」な場合には、『刺激的』を訴求するよりも『リラックス』イメージに結びつくことを強く訴求する方が、効果は高いであろう」とする（29頁）。

浅川らは「与那国島の観光パンフレットの訴求内容分析」のはじめにおいて、公共事業の見直し・削減とそれに伴う人口流出の歯止めの一つに観光の活性化を挙げて、訴求の重要性を説いている。そして後者の論文において、より効果的なパンフレットとはどのようなものかを体系的に明らかにできれば、今後は、観光パンフレットだけでなくインターネット広告にも応用できるという。さらに受容内容の分析についても「ホームページ・電子掲示板・ブログなどの評判分析などとともに、重要性が増してくるものと考え」と結んでいる（29頁）。

鈴木涼太郎の「観光研究における方法論的認識に関する一考察 旅行パンフレットを対象としたイメージ研究をめぐる」『立教観光学研究紀要』第6号（立教大学大学院観光学研究科 2004年3月）は、観光研究が学際的であると言われながらも既存の学問領域からの概念や方法をほとんど修正せずに適用してきたことへの反省から、「ツーリストの行動やイメージ形成において影響を与えるものとして頻繁に対象化されている」観光パンフレットを取り上げて、「パンフレットとそのイメージに関する研究が、研究対象をいかなるものとしてとらえて来たのか、その認識を整理し、そのような方法論的検討から、観光研究における新たな研究の可能性について考察すること」を目的とした論文である（51頁）。

観光パンフレットが「潜在的なツーリストが、ツーリストとなるプロセスにおいて非常に重要な意味を持つメディア」（51頁）であり、また「観光地のイメージを生み出すためのメディア」（52頁）でもあることを踏まえ、その認識整理において観光パンフレットを使った

先行研究に数多く言及している。そしてこれらの観光パンフレットが研究において重要な位置にあり、度々取り上げられてきた理由を「どこにでも存在し誰もが手にすることができる、あるいは誰もが一度は手にするメディア」であるからだとしている（53頁）。

トロントに事務所を構える21の政府観光局からパンフレットを収集し、そこに掲載された写真を景観や文化に類型化し、それぞれの国ごとにどの種類の写真が多く使われたかを分析、それぞれに優勢なイメージが存在することを示した研究や、イギリスで発行された11のパンフレットの全1470頁、5172点の写真を分析して、ツーリストと現地の人々との出会いは、パンフレットの中で既にある種の制約を受けており、観光パンフレットがツーリストの行動に強い影響を与えるメディアであるとする研究が紹介される。

また、イギリスの6つの旅行会社が1983年に発行したパンフレットから、表層的なレベルにおいては旅行商品を売るための媒体にすぎないパンフレットが、消費者によって日常の現実から逃避するためのイメージを創り出しているとする研究、イギリスの4つの旅行会社が発行したものに加えて、見本市会場で収集した東南アジア方面のパンフレットの写真と言語メッセージから、パンフレットのイメージを消費すること自体が自己目的化しているとする研究も紹介している。

これらから鈴木は、「パンフレットが、観光地・旅行会社とツーリストを結び付ける媒体であると同時に、観光地のイメージや現代消費社会の『神話』を創り出す媒体でもある」と指摘する（53頁）。

なお、鈴木はこれまでの観光パンフレットを用いた観光研究が、パンフレットというメディアが表象する観光地のイメージは観光地の現実に即したのではなく、ある種のステレオタイプが存在を明らかにする視点や、観光地を表象する行為それ自体が持つ権力性、政治性を指摘する論議に傾いていることを批判する。

そして、観光パンフレットのメディアとしての働きにおける新しい視座として、メディアとしてのパンフレットの持つ独自性を考察する研究の必要性、パンフレットがどのような存在として生み出され、消費されているか、を強調する。

それは、観光パンフレットを、それを取り巻く社会的・文化的な文脈から切り離さないことが重要であり、潜在的なツーリストの手にとられ、読まれ、消費されていくプロセスへの問いである。さらにパンフレットに掲載されたすべてのメッセージを全体的に対象化する必要性。例えば写真だけを取り上げるのではなく、旅行条件の説明や料金一覧などパンフレットの内容との関係の中からいかにして写真が存在しているかの問いがあるとする。

これらの研究を通じて「既存の研究の蓄積を整理し、ツーリストのイメージをより立体的なものとして描き出すための基礎となると考えられるのである」と述べている（57頁）。

高嶋竜平は「車窓の魅力に関する研究—大正・昭和初期の観光パンフレットを手がかりとして—」『日本観光研究学会第17回全国大会論文集』（日本観光研究学会 2002年12月）で、箱根登山鉄道と駿豆鉄道（現、伊豆箱根鉄道）の発行した観光パンフレットを用いて、両社の箱根への観光客誘致の方法について考察している。

箱根登山鉄道発行の『本邦唯一の山岳鉄道箱根登山電車』という観光パンフレットから、同鉄道では「利便性」が売りであり、小田原から「早く箱根の観光対象に到達できること」が強調されていることを読み取っている（214頁）。

一方、箱根の観光開発で遅れをとった駿豆鉄道発行の観光パンフレットは、自社資本の開発した自動車専用道路を走るバスを売り込むために「車窓」という「新しい風景体験」を打ち出している。熱海からのバス路線図を立体的に描き、「意図的にコースを山の裏側に消失させるような描き方をすることで、高い山の尾根を超えながら箱根を目指す同社コースの魅力を強調している」という（216頁）。

高嶋はさらに一步進めて、「観光パンフレットの史料としての価値に関する考察」『立教観光学研究紀要』第10号（立教大学大学院観光学研究科 2008年3月）で、観光パンフレットが歴史史料として重要なものであることを論じている。

歴史学において公的文書中心では十分に反映できなかった庶民の生活や文化が史料の多様化（庶民の生活を描いた図像の分析）の中で積極的に議論されていることを指摘し、「観光という庶民が多く参加した活動の歴史整理を行う際も」、観光パンフレットが大いに参考になるという（30頁）。

観光史における図像史料には、記念写真、絵葉書、ガイドブックの挿絵があるが、とりわけ観光パンフレットは「図像が大量に印刷され、ある観光地に対する庶民の共通理解を形成するのに強い影響力を持っていたと考えられるので、大正・昭和初期の「観光パンフレットの史料としての特性を整理する必要がある」という（30頁）。

発行目的が「観光者に対して自社沿線の観光の魅力をアピールすること」にあり、内容は観光者の具体的な行動、興味関心に即したものであるため、「開発者と観光者の心理のやりとりが成立」し、観光者の心理（＝感性、嗜好）を読み取ることが可能である（30頁）。

しかし、これまでは、博物館における展示での扱いから、文献史料で明らかになった史実を補足する史料という位置づけであり、一次史料としての分析方法について十分に議論でき

ていないとする。しかし、先に挙げた高嶋自身の論文（「車窓の魅力に関する研究」）から、「図像、テキストなど観光パンフレットが複合的なメディアであるということに注目しながらそこに記録された情報を抽出し、必要に応じて文献史料にもあたるなど、観光史研究における多様な史料の1つとして位置づけることに、観光パンフレットの史料としての価値がある」とし、「ケーススタディを重ねることによってその有効性を証明していくことが必要である」と結論づけている（32頁）。

以上、5本の観光パンフレットをテキストに用いた論文を紹介した。観光パンフレットにおいても、旅行案内書と同様に、ある地域が持つイメージの形成を探るツールとなりうるということが明らかになったと思う。そしてそれは、観光パンフレットが「観光という庶民が多く参加した活動」（高嶋）において、「どこにでも存在し誰もが手にすることのできる」（鈴木）もの故に、研究材料として重要なのである。

さらに高嶋は、観光パンフレットの発行目的を自社沿線の魅力をアピールすることと言い、大量に印刷されたことが資料として重要であるとする。旅行案内書の場合は大手の出版者が刊行するものも多くあり、これが必ずしも「自ら」の沿線もしくは観光地をアピールするために刊行されたものでない点で両者を区分する大きな要素といえるかもしれない。

浅川ら、そして鈴木の研究では、観光パンフレットに記載された記述や写真が観光研究において基本的な分析対象であった。特に浅川らの1つのパンフレットをめぐる「訴求内容」と「受容内容」の分析は「アピール」と「なまざし」の交差点のマッチングをテーマに据えた論文である。

なお、鈴木も高嶋も共にのべているように、観光パンフレットを用いた研究においては、今後のより深化した展開が必要であるとする点には注目しなければならない。

鈴木は、観光パンフレットとは何かということが十分に検討されないまま研究の分析対象となってきたことを指摘している（51頁）。高嶋も、観光パンフレットが図像とテキストからなる複合メディアであることを認識し、「多様な史料の1つとして位置づける」必要性を説いている（32頁）。

このことは、第四節で指摘した、観光学の辞典においてもその明確な定義がなされていない旅行案内書についても同じ指摘ができると思う。

研究のさらなる展開のためには旅行案内書や観光パンフレットを自明のものとしてせず、これらの資料がどのようなメディアであるかについて追求していかなければならない。

おわりに

最後に、筆者が図書館資料としての旅行案内書に着目した理由を二点述べて本論を締めくくりたい。

一つは、「観光」が現在重要な産業として注目されている点にある。

製造業と違って観光業は「生産・雇用が国内で行われるため、『空洞化』とは無縁の産業」で、「旅館・ホテル業だけでなく、運輸、飲食、娯楽・レジャー産業まで含む裾野の広さを持っているため、経済に対する波及効果が大きい」と期待されている。さらに外国人旅行者が日本を観光することは「海外の人々の自国（日本—引用者註）に対する理解を深めるといふ効果も持っているため、広義の安全保障の面からも注目を集めている」という（山崎治「観光立国に向けて」『レファレンス』第54巻第10号 通巻645号（国立国会図書館 2004年10月）81頁）。

グローバル化と高齢化社会が急速に進む中、経済力の低下が現実化している日本において、観光はその回復の起爆剤として期待されている。もっとも、低迷する国内経済の打開策として観光が注目されるのは、今が初めてのことはない。第二次世界大戦後の日本再建策の一つとして輸出の増大が叫ばれた際、外国人旅行者を誘致し、外貨を得る「風光の輸出」が議論されたこともあった。そして、その背景には円の暴落の中で外国人旅行者が急増し、観光が「外貨獲得第四位」を占めた恐慌後の1934（昭和9）年から1936（昭和11）年の実績があったという（『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』（白幡洋三郎/著 中央公論社 1996年6月）92-93頁）。

人が旅行先を選ぶのに欠かせないものが観光地イメージである。『大阪ブランド戦略活動記録（2004年9月-2007年3月）』（大阪ブランドコミッティ [2007]）は、外国における大阪のイメージ調査において、6カ国の旅行案内書に記載された大阪イメージを分析している（62-76頁）。

本論では、浅川らの与那国島の旅行案内書（観光パンフレット）を用いた訴求内容と受容内容を分析している論文を紹介した。また、観光地イメージの歴史的な変遷については、小長谷論文による函館の例と今野らの論文による日光の例を挙げた。

その土地のイメージをどのように形成するか、また、「アピール」と「まなざし」をいかにマッチングさせるかを知る手がかりとしても旅行案内書を利用することができるのである。

もう一点は、「弊履のように捨てられる資料」という旅行案内書に対する見方への打開を試みた点にある。この点は、第一節でも触れたところであるが、もう少しそのバックボーンについて考察していきたい。

図書館資料（書籍）は、「発信者のメッセージ」と、紙という「モノ」とが結び付いたものである。この図書館資料からは、三つの情報が発信される。

一つは、資料を構成する一つである発信者のメッセージである。いわば書籍の内容で、書かれたもの、著者なり編者が自らの頭の中に描いたメッセージを文字という記号に置き換えて情報発信したものである。読み手はこのメッセージを読書という行為を通して受信する。

しかし、このメッセージは発信者の一方的な意思に拘束されるわけではない。あくまで受信者の意図に委ねられるものである。ロジェ・シャルチエは『書物から読書へ』（みすず書房 1992年5月）の序言で「読み手はそれぞれ、個人的ないし社会的な、また歴史的ないし実存的な、みずからに固有な参照体系をもとに、程度の差はあるが、独特であったり、ありきたりであったりする一つの意味をテキストに付与し、それをもってテキストをみずからのものにする」と述べる（4頁）。

何より新しい情報が求められる旅行案内書の場合、発信者は最新の旅行の情報を伝えようとするが（アピール）、それはさまざまな読み（まなざし）にさらされる。そして、そのさまざまな読みはさらにさまざまな読みさらされることで、時を経て内容が現状に即さない陳腐なものになっても、本論で紹介したようにジェンダー表現、民族的マイノリティ、植民地朝鮮等を分析する有効なテキストとして存在することができるのである。

図書館の資料が発信する二つ目は、資料を構成するモノが発する情報である。紙の原料や活字、本の大きさや状態など書かれたもの以外が情報となる。

三点目は、その資料が存在する、ということによって生じる情報である。いつ発行されたのか、発行された際の類書の刊行点数はどのくらいか、どこに所蔵されているのかということと自体が情報となる。

1964（昭和39）年から2008（平成20）年までに刊行された海外旅行案内書を分析した岩田の論文は、一点一点のテキストの内容ではなく、いつ頃からどの地域の旅行案内書が刊行されたのかを追った、メタレベルでの研究である。

こうした三つの情報を組み合わせることで、「あらゆる出版物はその時代なり社会なりの切り口を見せてくれるものであって、出版物を通してそれが出版された時代の人々の、報道・教育・評論・娯楽などに対する社会的ニーズを探る（『なにわ出版事情』（大阪市立博物館

1989年) 序) ことが可能となる。

「アピール」と「まなざし」が交差する旅行案内書も然りであり、観光地イメージの分析はもちろんのこと、今後もさまざまなく読み>が試みられることを期待したい。

また、それに応えるためにも図書館は旅行案内書を重要な資料と位置づけ、収集、整理、保存して後世にまで提供していく責務を負っているのである。

【註】

- (1) 「眺めのもっとも美しいもう一つの場所は、島の東山の頂きに近い燈台である。▽燈台の立っている断崖の下には、伊良湖水道の海流の響きが絶えなかった。伊勢海と太平洋をつなぐこの狭窄な海門は、風のある日には、いくつもの渦を巻いた。水道を隔てて、渥美半島の端が迫っており、その石の多い荒涼とした波打際に、伊良湖崎の小さな無人の燈台が立っていた」(三島由紀夫『潮騒』新潮社 6頁) という描写は50年を過ぎた時点でもそのままであった。
- (2) 金子は「戦後のガイドブックが、戦前のそれと比較して」と前置きしているが、刊行された数が膨大なために書誌学的検討が充分になされなかったのは、戦前戦後を通じて言えるのではないかと考える。
- (3) 岩田は、旅行案内書には「著者個人の名が奥付に記されていない」ものが一般的と書く(114頁)。ここに、「無名でも著者が明記されているもの」という文言を加えておきたい。
- (4) 現在のところ三井文庫所蔵のものが知られているだけであり、冒頭の数丁が欠けているために、三井文庫では『明暦板道中記』とし、今井は『道中記』とする(山本 前掲書 114頁)。ここでは、刊行年がわかるということで『明暦板道中記』とする。
- (5) 例えば、「企画展 お江戸のガイドブック 江戸名所図会でたどるすみだの名所」2003年9月20日-11月9日 すみだ郷土文化資料館。「所蔵資料展 名所が語る江戸・東京の歴史」2003年10月6日-10日 東京都文書館。「江戸時代の観光ガイドブック展」2009年10月14日-11月23日 市立枚方宿鍵屋資料館。
- (6) 山近博義は「近世名所案内記類の特性に関する覚書-『京都もの』を中心に-」『地理学報』第34号(大阪教育大学地理学教室 1999年)で「小型案内記」は18世紀初頭より表われるとしている。
- (7) 『旅』は現在、古本屋をとおしても手に入れにくい状況にある。また、公立図書館は一定年数が経過した雑誌類を廃棄することが少なくない、と述べている(274頁)。
- (8) ユネスコでは、パンフレットを「表紙を除いて、4ページから48ページの非定期刊行の印刷物」と定義し、1枚ものの印刷物をリーフレットと呼ぶが(図書館問題研究会図書館用語委員会/編『図書館

用語辞典』(角川書店 1982年10月))、旅行のためのこうした小冊子および1枚物をここではまとめて「観光パンフレット」と呼ぶこととする。

- (9) 「Dr. コトー診療所」は2003年7月から9月、2006年10月から12月までCXで放送されたテレビドラマ。2004年の1月と11月にも特別編が放送されている。
- (10) 浅川らのこの論文では、配布した観光パンフレットが『凜として佇む日本最西端の島、与那国島-Dr. コトー診療所ロケ地マップ』とある。出版者については記載されていない。

[参考文献]

- ・今井金吾『道中記集成』全47巻(大空社 1996年6月-1998年7月)
- ・岩田晋典「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学部紀要』第12号(立教大学観光学部 2010年3月)
- ・上杉和央「17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」『地理学評論』第77巻第9号(日本地理学会 2004年8月)
- ・大阪市立博物館『なにわ出版事情』(1989)
- ・大阪ブランドコミッティ『大阪ブランド戦略活動記録(2004年9月-2007年3月)』([2007])
- ・金子直樹「国内観光とガイドブックの変遷」神田孝治編著『観光の空間 視点とアプローチ』(ナカニシヤ出版 2009年10月)
- ・白幡洋三郎『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』(中央公論社 1996年6月)
- ・西野由紀「先達はあらまほしき-『名所図会』と旅人-」『国文学論叢』第52輯(龍谷大学国文学会 2007年2月)
- ・日本交通公社『日本交通公社七十年史』(1982年)
- ・古崎康成編『テレビドラマ原作事典』(日外アソシエーツ 2010年1月)
- ・三島由紀夫『潮騒』(新潮社 2007年10月)
- ・森正人『昭和旅行誌 雑誌『旅』を読む』(中央公論新社 2010年12月)
- ・山崎治「観光立国に向けて」『レファレンス』第54巻第10号 通巻645号(国立国会図書館 2004年10月)
- ・山近博義「近世名所案内記類の特性に関する覚書-『京都もの』を中心に-」『地理学報』第34号(大阪教育大学地理学教室 1999年)
- ・山本光正「旅行案内書の成立と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第155集(2010年3月)
- ・ロジェ・シャルチエ編『書物から読書へ』(みすず書房 1992年5月)